

# 国語

(全13ページ)

## 注意事項

- 一 受験番号、氏名および解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 二 問題用紙に解答を書き込んでも採点されません。
- 三 字数制限の設問については、特別な指示がない限りは、、や「などの記号を字数に含めません。

例

こ	こ	が	、	「	私	の	母	校	」	と	な	る	。
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

(計十四字)



一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

2019年12月、厚生労働省は、この1年に国内で生まれた日本人の赤ちゃんが86万4000人とどまり、統計開始以来、初めて90万人を下回ったことを発表しました（推計値）。国立社会保障・人口問題研究所は出生数が86万人台になるのは2021年と予想していたので、予想より2年早いペースで出生数の減少が進んでいることになります。また、死亡数は戦後最も多い137万6000人で、死亡数から出生数を引いた自然減は初めて50万人を超えました。1年に50万人も日本人がいなくなってしまう社会になったのです。この出生数は前年比で約6%の急減で、少子化、人口減少が予想以上に加速していると見られます。

人口減少は特に地方に深刻な影響を及ぼします。人口減少が進めば、現役世代の減少によって、地域の産業が衰退、税収が落ち込み、老朽化したインフラは徐々に崩壊して再整備が困難になります。仕事を失った若い世代が都会へ流出し、加速度的に人口が減少する結果、行政機能も維持できなくなり、地域はやがて消滅に至るのです。

この国を苦しめる人口減少の流れを、少しでも食い止めるすべはないのでしょうか。

私は全国を歩くなかで、この大問題を解決するヒントを目撃してきました。今、人口減少というゼツボウ的な現状に立ち向かい、その流れを変えようと動き始めている場所が、各地に現れています。ここでは、疲弊した町が再生され、地域に活気があふれ、若い人たちが都会から戻っ

てきて、新しい命がその土地で誕生するという、素晴らしい循環が生まれ始めているのです。

その現場の中心には、ある共通点がありました。それは、その土地に昔からありながら忘れられていた自然資源を、現代のテクノロジーを駆使して蘇らせることです。

かつて日本の田舎は、その場所にある自然資源を中心として人々が豊かに暮らしていました。集落を流れる清らかな水、緑豊かな深い森、大池から湧き出す温泉の熱など、それぞれの地域がそれぞれの特性を活かし、そこにある自然の恵みに感謝しながら、その自然由来のエネルギーを活かした個性豊かな暮らしを送っていたのです。逆に言えば、そこに集落があったということは、当時の人々の暮らしを養うだけの豊かな自然資源がすでにその地域に存在していたということなのです。

しかし、高度成長期以降、道路網が整備され、送電線が結ばれ、地域は格段に便利になりました。便利になることはもちろん地域にとっても歓迎すべきことなのですが、その一方で、全国で効率化や画一化が重視され、地域にあった自然資源は次第に使われなくなりました。そして、工業化にトモナウ労働力人口の移動や集中が進み、地方から都市への人口流出が続き、地域の豊かさは失われていきました。

また、電気は海外から輸入した化石燃料をエンジン部にある大規模な火力発電所で燃やして作り、巨大な送電網で日本の各地域に届けられるようになりました。その陰で、それぞれの場所にある自然由来のエネルギーは次第に忘れられていったのです。

さらにその後のバブル経済の崩壊などもあり、地方は長い間、不況に苦しみ、都会に流出した若者たちも帰ってこなくなり、超高齢化や過疎化が進みました。その結果、限界集落が増え、人々の生活の基盤となっていた地域が消滅の危機に瀕するという大ピンチに追い込まれています。

このギリギリに追い込まれた状況のなかで、今、各地で、ネムッテいた自然資源にもう一度注目し、その可能性に懸け、立ち上がる人々が現れ始めました。その人物たちが地域の命運を託したのが、「再生可能エネルギーの地産地消」だったのです。それは、その場所にある自然資源を、最先端の技術を利用して電気や熱として生まれ変わらせる、地域発の「エネルギー革命」でした。

各地域では、立ち上がった人物の提案を激しい議論の末に受け入れ、地域一丸となって協同組合などの組織をつくり、再生可能エネルギーによる発電事業などに挑戦し始めました。こうした各地の取り組みが今、様々な困難を乗り越え<sup>①</sup>大きな成功を収めているのです。

再生可能エネルギーとは、非化石エネルギー源のうち、エネルギー源として永続的に利用できるものと認められるもので、太陽光・風力・水力・地熱・太陽熱・大気中の熱その他の自然界に存する熱・バイオマス（動植物由来の有機物）の7種類と定められています。石油や石炭といった化石燃料のように枯渇したり、二酸化炭素や窒素・硫酸化物などを排出することのないクリーンなエネルギー資源で、自然エネルギー、グリーンパワーという呼び名もあります。

その土地にある自然資源を再生可能エネルギーで活かすという「エネルギー革命」は、なぜ成功し、地域に豊かさをもたらすのでしょうか。化石燃料を中心としたこれまでの社会と、再生可能エネルギーを中心とした新しい社会との違いをお金の流れで追ってみると、重要なことが見えてきます。

**A**、これまでのように石油や石炭といった海外からの化石燃料を中心とした社会では、電気代として支払ったお金は、大手資本を通じて地域から逃げていき、最終的には産油国など海外に流出してしまします。日本エネルギー経済研究所によれば、日本が化石燃料の輸入に支払ったお金は2018年度に年間19兆円を超えるという莫大な額に膨らんでいます。同じ2018年度に私たちが支払った所得税の総額19・9兆円にはほぼ匹敵する膨大な額のお金が海外に流出しているのです。

**B**、地域の再生可能エネルギーを中心とした新しい社会では、再生可能エネルギーに支払われたお金は海外には流れず、再生可能で発電した国内の地域に向かい、その中を循環します。お金の流れが、「海外へ流出」から「地域内を循環」へと変わり始めるのです。再生可能の電気に支払われたお金は、電力小売業者を通じて、その電気を生んだ地域の再生可能発電会社や協同組合などに流れ、施設の設置やメンテナンスなど、それぞれの地域に雇用を生み、最終的には地域の住民に届きます。再生可能の発電所は従来の火力発電所などに比べれば一般的に規模が小さく、その地域の住民でも資格を取得すれば十分に維持管理が可能なものが多くあります。こうした地域の発電所が地元の住民に雇用をもたらし、

地域の中をお金が循環するようになるのです。

C、再生エネで得たお金を元手にして、発電以外の新しい事業がその地域で始められると、そこには新たな雇用が生まれ、地域内をお金循環しながら経済活動が拡大していきます。それは人の流れにも変化を生み、都会に流出していた若い人たちが、地域に戻ってくるようになるのです。地域にある豊かな自然や暮らしに感謝しながら、自然と共生し、自然資源を最大限に活用するという持続可能な新しい循環型の社会が、今、各地に次々と誕生しているのです。

仮に、海外から輸入する化石燃料由来の電気から、その一部でも純国産の再生エネ由来の電気に切り替えれば、海外に流出していたお金の一部が再生エネ電気を生む地域に還流し始め、日本国内でエネルギーとお金の循環が始まることにつながります。

(山口豊『再生エネ大国 日本』への挑戦』より)

問一 二重傍線部 a～d のカタカナを漢字で書きなさい。なお、送り仮名が必要な場合はその部分をひらがなで書きなさい。

問二 A C にあてはまる語句として最も適当なものを、

それぞれ次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア さらに      イ 例えば      ウ つまり  
エ それでは      オ 一方      カ そのため

問三 傍線部①「大きな成功」とあるが、具体的にはどのようなことか。それを述べた一文を、傍線部①より前から抜き出し、その最初の五字を答えなさい。

問四 傍線部②「エネルギー革命」についての説明として最も適当なもの

のを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 流出した若い人々を都会から呼び戻すことによって、その場所にある自然資源を有効に活用していくというもの。
- イ 地方にある自然資源を、現代の最先端の技術を使うことによって、効率的・画的に利用して便利さをもたらすというもの。
- ウ 地方でまだ使われていない化石燃料を再生可能エネルギーに加工して利用し、その地域の生活を豊かにするというもの。
- エ かつての田舎と同様にその地方にある自然資源を利用する取り組みを、現代のテクノロジーによって行うというもの。
- オ かつての日本で集落があった場所に着目し、その地域にある豊かな自然資源を用いて人々の暮らしを養うというもの。

問五 本文の内容と合致するものを、次のア～キの中から二つ選び、記号で答えなさい。解答順は不問とする。

- ア 国立社会保障・人口問題研究所によると、日本の人口の自然減は、予想より2年早いペースで50万人を超えている。
- イ 地方の人口減少が進むと、その結果としての税収の落ち込みにより、老朽化したインフラを整備することが困難となる。
- ウ 道路網や送電線が整備されることで地方は便利にはなるが、一方で、水や森や温泉などの資源を失うことにもつながる。
- エ 都会に流出した若者たちが原因となったバブル経済の崩壊により、地方の不況や過疎化は深刻な状況に追い込まれている。
- オ 再生可能エネルギーは、二酸化炭素や窒素・硫酸酸化物などを排出することがないクリーンなエネルギー資源と言える。
- カ 再生可能エネルギーの発電所を設置、メンテナンスするための費用は、発電以外の新しい事業による収益が元手となる。
- キ 再生可能エネルギーによって生まれた電気を最大限に活用することで、若い人たちが地域に戻ってくるようになる。

問六 波線部「重要なことが見えてきます」とあるが、ここでの「重要なこと」とはどのようなことか。本文中の言葉を使って、七十字

以内で説明しなさい。

問題は次のページに続きます。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈この場面までのあらすじ〉

小説家の「俺」(加賀野)の家に、生まれてすぐ生き別れとなった息子の智(とも)がやってきて、二人での生活が始まった。この日、「俺」は新しい担当編集者と打ち合わせをすることになっている。

誰かに見送られたことなど、子どものころ以来だ。実家を出てから一人で暮らしてきたから、「いってきます」や「ただいま」は三十年以上発していない言葉になる。

「いってきます」と言おうかと思ったが、言い慣れない言葉のせいか、うまく口にできず、俺は「ああ。じゃあ」とだけ言つて家を出た。

駅前の喫茶店に入ると、二十代後半くらいの男が俺を見つけてすぐさま「加賀野さん」と奥の席から声をかけてきた。

「片原と言います。やっと加賀野さんの担当になりました。僕、加賀野さんの作品は全部読んでいし、暗記している言葉もたくさんあるくらいなんです。僕は主人公だけでなく、加賀野さんの作品の登場人物みんな好きなんですよね。どれも人間らしくて」

片原と名乗った編集者は俺が席に着くや否や、目を輝かせてそう語った。

「今の連載が終われば、うちの社で書いていただけるんですよね? 次の作品、どうしましょう。ああ、加賀野さんと本を作るなんてわくわ

くする」

そう言つて、挨拶もそこそこにメモを取り出した編集者に、俺の心はどことなく弾み始めた。最近ほどの出版社も長く付き合のある編集者ばかりで、新しい人間と会うことはなかった。それが、こんなに楽しみにしてくれる人と作品を作れるのだ。どうしよう、何を書こうかと、久しぶりに心の隅が奮い立つ気がした。

「今、書きたいものありますか? 気になつてることとか」

片原は俺の分もコーヒーを注文すると、さっそく本題に入った。

「そうだな、どうだろう」

「今までにない感じがいいですよ。攻めた作品にしましょうよ」

「ああ」

「加賀野さんの作品の主人公、最近は三十代四十代が多いから次は学生とかどうでしょう?」

「ああ、そうだな」

「加賀野さん、今の若者の言動とか見ててどう思います? 若者が主人公だったらどんな話できそうですか?」

片原に次々と投げかけられ、俺も頭の中に浮かべてみた。

「若者……バイトをしてる青年とか……」

「いいですね。フリーター。どこか利那的で投げやりな生き方をして」「ああ。その青年がバイト先の年老いた店長と……、なんとというか、仲を深めていくとか」

注1 矢野の 笹野さんと智みたいな組み合わせは、おもしろいんじゃないだろうか。



ああいう二人なら、ごく普段の日常を描くだけでも、物語になりそうだ。

「仲を深めていく?」

「誕生日を祝ったり、どこか出かけたり、仕事仲間の粋を少しずつ越えていくというか」

「はあ……」

片原はさっきまでの勢いをなくして困った表情を浮かべた。

「生活環境も年代も違う人間同士が、仕事という括りで一緒にあって、距離を縮めていく過程は興味深いと思ったんだけど」

俺が説明を加えると、片原はますます眉を寄せた。

「で、どうなるんでしょう? 店長が青年の不注意で亡くなるとか、経営が破たんするとか?」

「いや……。そういう大きなことは起こらなくて」

「どうかな。今までの加賀野さんの作風と違い過ぎませんか? 僕はまだ新人なのでよくわからない部分もあるんですが、率直に言わせてもらうと、それおもしろくなりますかね」

遠慮がちにそれでもはつきりと彼は言った。どうやらあまりいい思い付きではなかったようだ。

「ほか、ないですか? もっと身近な題材で」

「身近……。それなら、地域の活動に焦点を当てるとか、どうだろう。大掛かりじゃない祭りとか」

「嫌だな。加賀野さん」

片原は小さく笑った。

「それ、題材聞いただけで薄っぺらい感じがしますよ。心温まる交流とか、みんなが集まって何かを成し遂げるとか。いかにも安っぽい」

「そう、だよな」

「それより、もっと加賀野さんらしい、加賀野さんの本当に書きたいことで行きましょう」

「俺らしい話か」

「そうですね。読者に迎合するのはやめましょう。無理に温かい小説に持つて行く必要はないですよ。人間って醜いものではないですか? そういうものから目を背けず現実を書くのが小説の役割でもあるって僕は思うんですよね」

片原はそう言うと、運ばれてきたコーヒーに口をつけた。

「生きるとは何か。そこ掘り下げていいたら、闇に触れずにはいられないですから」

「そうなのかな」

俺もコーヒーを飲もうとして、牛乳が入っていないことに気づいた。

ブラックでは飲めないし、<sup>注2</sup>フレッシユは好きじゃない。しかたなく水を口に入れると、

「最近の若者の特徴をネットで調べてきたんですけど」

と、片原が何枚かのプリントをテーブルの上に出してきた。

「今の若い人間って、人に認められたい欲求やつながりたい思いは強いけど、リアルな対人関係を結ぼうとはしないみたいですね。あと、我慢することも苦手らしいですよ」

「はあ……」

ホームページをいくつか印刷したものでしょう。プリントには若者について**分析**が書かれている。

「今の若者ってマニュアルどおりのことしかできないんですよ。そこから外れた時、若者が何に気づくのか。自分の無能さを思い知った若者はどう行動するのか。そこ書いていくのって意味があることだと思っんですけど」

まだ二十代であろう片原が若者について語るのを、俺はぼんやりと聞いていた。最近の若者って、彼はいったい誰のことを指して言っているのだろうか。このプリントにたいそうに書かれている結果は、どこの誰を分析してまとめられたものなのだろう。「積極性がない」「打たれ弱い」「自信がない」。並べられたプリントに書かれた特徴。さしあたって、俺が知っている唯一の若者、智はどれにも当てはまっていない。こんなデータをいくら読んでも、誰のことともわかるわけがない。

「評論や分析をたくさん読むより、一分でもいいから人と話せて、確か**笹野幾太郎**さんが言ってたな」

俺がぼそりと言うのに、片原は大きくうなずいた。

「ですよ。大学生かフリーター、そういう人間にインタビューする機会設けますね。彼らの闇、掘り下げていきましょう」

「いや、いい、いい」

「どうしてですか？ 今の若い人間、自分についてしゃべりたがってるやつ多いから、いくらでも取材対象は見つけられますよ」

「いいんだ。そう、若い人間は、身近にいる」

見ず知らずの若者と話すなんてとんでもない。しかも、他人の闇になど触れたくもない。俺は即座に断った。

「そうなんですか。じゃあ、とりあえず新作はこの方向で行きましょう。苦悩を抱えてる若者は多いから、共感してもらえるはずですよ。新しい読者の獲得につながりそうですね」

方向性が決まり、片原は満足げに微笑んだ。

「ああ、そうかな」

残念ながら、次の小説の装丁も黒か灰色。また暗い色になりそうだ。

打ち合わせは一時間程度で終わり、店の前で片原と別れると、俺はバス停へ向かって歩いた。

「人間の闇を書いた小説か……」

片原に言われたことを思い出すと、気が重くなる。

**夏目漱石**や**太宰治**。十代のころ夢中で読んだ小説は、美しいものも汚いものも含め、俺に人間の奥底にあるものや、生きることの真実を見せてくれた。現代だって、生きるとは何かを語る素晴らしい小説はたくさんある。人間や生命のたくましさや醜さ、本来ある姿を描こうとしている作品はおもしろい。でも、俺はそれを、書くべき人間なのだろうか。

(中略)

人間とは、生きるとは、そんな大きなことを探る以前に、自分が父親と言えるのか、息子とは何なのか。その辺りに目を向けるのが先のように

な気もする。

バス停で時刻表を確認すると、通勤時間帯でもないせい、あと三十分以上バスは来なかった。智は家にいるのだろうか。せつかく駅まで出てきたのだから、何か買って帰ろうか。そう考えて、俺は大人になってから土産というものを買ったことがないことに気づいた。土産なんて、中学校の修学旅行の時に、親に買って以来だ。

やっぱり食べ物が無難だろうと、俺は駅前のショッピングセンターの地下へと足を踏み入れた。洋菓子に和菓子、惣菜そうざいに弁当。様々な店が並び、平日の昼間なのに、人が行きかっている。

俺はショーケースの中に目をやりながら、店内を歩いた。シュークリームにショートケーキにゼリー。華やかなものも、おいしそうなものもたくさんあるが、何がいいのかわからない。誰かが食べることを想定して買った物をしたことがないから、ぴんとこない。

そもそも智は何が好きなのだろうか。俺の家に最初に現れた時は、豆大福を持ってきた。よく買ってくるからローソンのからあげクンも好きなのだろう。ついでにコーヒーを淹いれるのもうまい。大福は甘く、唐揚げはスパイシーで、コーヒ―は苦い。三つの共通点は何だ。好物を推測するのは、推理小説を練るより難しい。

頭を悩ませながら足を進めると、和菓子屋が並ぶコーナーが出てきた。ケーキよりあっさりしていていいだろうかとショーケースをのぞきながら歩いていた俺は、小ぶりの大福が並ぶ店の前で足が止まった。

抹茶大福、豆大福、栗大福、え？

「カフェオレ大福？」

そんなものがあるんだと、思わず声が出た。

「こちら、コーヒ―味の太福でとても人気の商品なんです。中に餡あんとコーヒークリームが入っていておいしいですよ」

俺のつぶやきにすかさず店員が声をかけてきた。

コーヒ―が大福になっているとは。そんな不思議な代物しろものがあったのか。「大福はほんのり塩味が利いているので、それほど甘ったるくもなく、男性の方でもぺろりと召し上がっていただけだと思います」

豆大福とからあげクンとコーヒ―。それぞれの一部を引き継いだような商品があるだなんて。

「じゃあ、これ、これをください。二人分」

「えっと、お二つでいいですか？」

「あ、はい」

カフェオレ大福。和と洋が融合ゆうごうされた画期的な菓子だ。これは、すごいものを見つけた。智はびっくりするにちがいない。俺はわくわくして、紙袋を受け取ると帰り道を急いだ。

(瀬尾せおまいこ『傑作けっさくはまだ』より 一部中略)

(注)

1 笹野さん………笹野幾太郎。智がアルバイトをしているコンビニ

ニの店長。

2 フレッシュユ………コーヒ―などに加えるクリーム。

問一 二重傍線部 a、c の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 傍線部①「着くや否や」・傍線部②「眉を寄せた」の語句の意味

として最も適当なものを、それぞれ次のア～オの中から一つずつ  
選び、記号で答えなさい。

①「着くや否や」

- ア 着くまで待たず。
- イ 着くとすぐに。
- ウ 着くことを促し。
- エ 着いて落ち着いたら。
- オ 着くかどうか尋ねて。

②「眉を寄せた」

- ア 腹を立てて怒りの表情を示した。
- イ 信じられないとあきれた表情をした。
- ウ 疑問を抱いて困った顔をした。
- エ わかっているような顔つきをした。
- オ 困り果てて泣きそうな表情になった。

問三 「俺」との会話における片原の話の進め方として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言葉巧みに「俺」を誘導して「俺」の本音を引き出し、その内容を作品に取り入れようとしている。

イ まずは大まかな提案を行ったが、そこから先は「俺」に任せ、思うように書いてもらおうとしている。

ウ 読者の傾向を客観的なデータで確認し、売れるにはどうすべきかを説得力をもって示している。

エ 自分の中である程度決まった考えをもっており、「俺」との話がその方向に行くように仕向けている。

オ 新しい読者の獲得に焦点を当て、「俺」のこれまでの作品の魅力を一度取り払うべきだとほのめかしている。

問四

本文中から読み取れる「俺」の人物像についての説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の考えというものをもっておらず、相手がどう感じているかということばかりを気にしている人物。
- イ 自分自身では特にこだわりをもつことがなく、基本的に状況に流されてしまう人物。
- ウ 他人に対して自分の意見をはっきりと伝えることができず、周りの主張に合わせてしまう人物。
- エ 他人の心の奥底にある思いをくみ取るために、常に自分や周囲の人間の生き方を見つめている人物。
- オ 自分に対する自信がない割には自分を否定されると傷つくため、誰とも距離を置こうとしている人物。

問五

この文章における表現の特徴について説明した文として適当なものを、次のア～キの中から二つ選び、記号で答えなさい。解答順は不問とする。

- ア 片仮名の表記を多く使うことによって、主人公の感じた現代社会への問題意識を浮かび上がらせている。
- イ 比喩<sup>ひよ</sup>を使って食べ物を見た目や味を表現することによって、読者の興味を引きつけやすくしている。
- ウ 主人公の視点から相手の様子や主人公の思考を詳細に描くことによって、主人公の心情を読み取りやすくしている。
- エ 一文を短くし、体言止めを多用することによって、作品全体にテンポのよさやスピード感をもたせている。
- オ 途中、過去を思い出す場面をはさむことで、主人公の迷いがどこから生じているのかがわかるようにしている。
- カ 「……」や「？」を効果的に使用することによって、会話のテンポや口調を想像しやすくしている。
- キ 周囲にある物の色調を鮮やかに描くことによって、登場人物の悩みの深さが推し量れるようにしている。

問六

波線部「そうなのかな」とあるが、「俺」が片原の言葉に疑問を感じたのはなぜか。五十字以内で説明しなさい。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「匙<sup>さじ</sup>を」A」と言うと、現代人は洋食の際に痲癩<sup>かんてん</sup>を起こす場面を思い浮かべやすいが、この「匙」は「匙加減」と同様、薬を調合する道具をさし、この病人は薬をどう調合しても助かる見込みがないと判断して薬品の調合を断念<sup>①</sup>する、つまり見放すことを意味する。

伝統的な和風建築の昔は、その家を訪問することを「敷居をまたぐ」という一つの動作で象徴的に表した。「敷居が高い」という表現も、その家では敷居を特別に高く造つてあるわけではない。敷居がやたらに高いと客がまたぎにくいところから、不義理をしてしまい、どうも訪問しにくいという心理を、物理的に象徴してみせた表現である。

筋肉の一部が凝つて硬くなることを「しこり」と称している。これは肉体のしこりだが、相手との間にもめごとが生じ、あとまで気持ちのわだかまりが消えずに残るといふ心理的な状態を表すのに、象徴的にそういう言い方をする例も少なくない。

「姿勢を直す」という表現は基本的に、あぐらをかいた楽な姿勢から、きちんと正座して背中を真っ直ぐに保つ改まった姿勢をとる体の動きをさしている。そこから、物事に対する態度や考え方をきちんとするといった精神的な在り方をさす場合にも象徴的に使われるように意味範囲が広がった。

「尻尾<sup>しっぽ</sup>」はもちろん動物の尾のことだが、犬などの習性からの連想で人間の態度や行動を比喩的に表現することもある。上位者に取り入ることを「尻尾を振る」と言い、降参して逃げることを「尻尾を」B」と言うのは

そういう表現にあたる。また、悪事やごまかしなどが露見することを「尻尾を出す」、相手の悪事<sup>a</sup>などを暴く手がかりを得ることを「尻尾を掴む」と比喩的・象徴的に表現する慣用も定着した。

「死に体」といつても「死体<sup>b</sup>」のことではない。相撲<sup>すもう</sup>で、取り組んでいる途中に一方の力士の体勢が大きく崩れ、自力では立て直せないと判断された場合、それを「死に体」と称する。これは専門語に近いが、それを立ち直る力<sup>c</sup>のなくなった内閣や企業や団体などを評する比喩として用いる例も散見する。

刀<sup>d</sup>の刃<sup>は</sup>と峰の間にある小高く盛り上がった線状<sup>e</sup>の部分を「鑷<sup>しご</sup>」と言う。刀剣を激しくぶつけ合いながら斬<sup>き</sup>り合いを演ずると、その部分が少し剝<sup>は</sup>がれ落ちることもある。「鑷<sup>c</sup>」という表現はもともとそういう物理的な現象をさしたが、今では現実にそんな決闘もめつたになく、「しご」が何であるかもほとんど意識にのぼらない。そのため、力量の接近した者どうしが同じ目標に向かって激しい争いを展開するという意味に使う象徴表現と化した。

「芝居」という語は歌舞伎<sup>かぶき</sup>などの伝統的な劇をさして使われてきたが、広く演劇一般を意味することもある。「芝居がうまい」のように演技をさす用法もある。上演する劇の筋や台詞<sup>せりふ</sup>の内容は原則として脚本・台本に記したものであり、事実そのものではない。そのため、「芝居」という語が相手を騙<sup>だま</sup>すための偽<sup>いつはり</sup>りの行為をさす象徴的表現ともなるから油断はできない。「芝居がうまい」と言われても喜んでばかりもいられないのである。

体の一部の感覚が一時的に麻痺<sup>まひ</sup>する現象を「しびれる」と言う。そういう

肉体の感覚ではなく、強い刺激を受けて陶醉状態に陥るといふ精神的な現象をさす象徴的表現ともなる。また、長い時間同じ姿勢で正座を続けると足がしびれてくる。そういう肉体的な現象を「痺れを切らす」と言うが、この表現も、脚の痺れとは無関係に、待ちくたびれていららするといふ精神的な状態をさすこともある。触覚的な記憶から感覚的にわかりやすい。

渋柿を食べたときの舌がしびれるような感じを「渋い」と言う。味覚とは関係なく、不満な折にそういう表情を浮かべると、やはり「渋い顔」と表現する。けちで金品を出し惜しむことを「渋い」と言うのも、金をいやいや払う際の表情とつながるのだろうか。一方、「渋い衣装」「渋い演技」のように、地味で落ち着いた深い味わいをさす、むしろプラスイメージとなる象徴的な表現もある。

穴や海のようになくぼんだものの最下部、容器の場合は外側の下の面を含めて「底」と言う。これが基本的な用法だが、「心の底」のように、物理的な窪みに関係なく、奥深いところをさすこともある。そのため、「底が浅い」という表現が内容に深みがないという意味になることもある。「底が知れる」はその人間や作品などにさほど深みを感じないという意味になりやすく、逆に「底が知れない」という表現は外から推測できないほど奥深さを感じさせるといふ意味合いになる。また、「底抜け」という語は、底というものが存在しないと思われるほど、どこまでも、といった意味合いで、「底抜けの大酒呑み」「底抜けに明るい」などと使われる。

(中村明『五感にひびく日本語』より)

問一 傍線部①「断念」と同じ構成の熟語を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 観劇    イ 山頂    ウ 禁止    エ 取捨    オ 腹痛

問二 

A
---

 $\sim$ 

C
---

 にあてはまる語句として最も適当なものを、それぞれ次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 削る    イ 打つ    ウ 巻く    エ 曲げる    オ 投げる

問三 二重傍線部 a～e の中で、文法的性質が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問四 傍線部②「深み」・傍線部③「その」の品詞名を、それぞれ漢字で書きなさい。

問五 波線部「姿勢を正す」とあるが、あなたはこれまでどのような形で、「姿勢を正」したか。「～」で、～と姿勢を正した。の形で、具体的に七十字以内で述べなさい。

